

3月度 月例会 講演録

日 時：平成20年3月3日（月） 12：00～13：30

講 師：平井 正修 氏（全生庵第七世現住職）

演 題：『最後のサムライ 山岡鐵舟』から学ぶもの

【坐禅について】

- ある禅宗の老師のところへ2人の学生が禅のご高説を賜りたいとやってきたが、その学生たちは老師が淹れたお茶も飲まずに、とうとうと持論を喋っている。老師は何を思ったかお茶の入った器に更にお茶を注ごうとしたため、学生が「それ以上注ぐとお茶がこぼれる」と言うと、老師は「お茶の入った器に更にお茶を注げばこぼれる。お前たちも、まず、自分の中を空にしてから来れば私の話が聴けるだろう。」と言った。
- 坐禅をしたからといって直ぐに無や空になれるものではないが、心を落ち着けて事にあたるのは非常に大切であり、心や身体にとっても良いことである。
- 坐禅というのは呼吸法でもあり、鼻から吸って鼻から吐く。人間は息を吸うと重心が上がり、息を吐くとき重心が下がって心も身体も落ち着いていく。息が長く呼吸が整っているのが心も身体も良い状態。数を数えながら細く長く息を吐くように心掛けると良い。

【山岡鐵舟の生涯(エピソードを中心に)】

- 剣・禅・書の達人と言われる山岡鐵舟は1836年、天保7年に江戸の本所で、幕臣旗本600石、御蔵奉行であった小野朝右衛門高福の四男として生まれた。
- 鐵舟が10歳のときに父親が飛騨高山の郡代に転任したことから高山で暮らすことになった。高山にある宗猷寺という禅宗の寺の住職が、鐵舟に冗談で「釣鐘が欲しいなら持って行きなさい。」と言うと、代官所の若い衆を引き連れて釣鐘を下ろそうとした。住職は冗談であったと謝ったが鐵舟は聞き入れず、困り果てた住職は父の高福に頼んで説得してもらったという。
- 鐵舟は高山時代の15歳のときに、入門してから1、2年にも関わらず、72歳の岩佐一亭から、弘法大師の流れを汲んだ入木道の五十二世を譲られる。鐵舟の努力と将来を見込んで譲られたものらしい。
- 鐵舟は生涯を通じとにかく多くの書を書いており、その字体は、書家でも読むのが難しい特有のものである。晩年、どのくらい書いたのか訊かれた鐵舟は「日本の国民1人に1枚は行き渡らないであろう。」と答え、「そんなに書くと大変でしょう。」と言われると、「他の人は字を書くが自分は墨を塗るんだからたいしたことはない。」と言ったという。
- 16歳のときに母が、17歳のときに父が他界したため5人の弟を連れて江戸に戻り、家督を継い

だ兄の家に居候する。乳飲み子の弟のために乳母を雇ってもらえなかったため、鐵舟がもらい乳などして面倒をみたという。

- 19歳のときに槍の達人である山岡静山に出会う。20歳のときに静山が事故で亡くなると、静山の弟で養子に出ていた高橋泥舟に見込まれ、静山の妹、英子の婿となり山岡家を継ぐことに。御家人に中でも一番身分の低い家に進んで入ったあたり、世俗に無欲であった鐵舟の一面が窺える。
- この頃、とにかく貧乏でボロボロの服を着ていたため「ボロ鐵」とあだ名された。また、誰彼なく剣を合わせるため「鬼鐵」とも呼ばれ、「剣術は常在戦場、道場の中の稽古だけでは上達しない。」と家に出入りの御用聞きを相手に容赦なく試合をするので、御用聞きが来なくなってしまふほどであった。
- 命の根源にかかわる悩みを除かないと剣術も禅も極めることは出来ない、その大元を突き止めてやろうということで、色情の修行にもだいぶ励まれた。飲む、買うの毎日に親戚一同が怒りだしたが、奥様は「ウチの主人は何かがあることなので、そのうち戻ってくるでしょう。」と。できた奥様だったが、そんな奥様を見つけられたのも山岡先生の徳である。
- 27歳のときに将軍家茂公上洛の先供として道中警護と京都市中の警護にあたるために浪士隊を結成して京都にのぼるが、上洛後に浪士隊が分裂。鐵舟は江戸に戻り、責任を取って謹慎、閉門に。
(このとき京都に残ったのが新撰組となる。)
- この年に浅利又七郎という中西派一刀流の達人と出会う。打ち込む隙のない又七郎が寝ても夢に出てくるほど幻影に悩まされるが、45歳のときに剣も無敵の境地に達し、足掛け18年の幻影を脱する。
- 幕府が鳥羽伏見の戦いに負け、徳川慶喜公は官軍と戦う意思がないとして上野の寛永寺に謹慎。薩長軍が江戸に迫る中、慶喜公の恭順の意を伝える役を請負った鐵舟は、駿府の大本営にいた西郷隆盛と談判する。最終的にはこの後の勝海舟と西郷との会談により江戸無血開城となるが、大筋はこの鐵舟と西郷との会談によって江戸無血開城がなったと言われている。
- 鐵舟が残した自筆の文書にこの談判の様子が著されている。西郷は慶喜公の恭順の意を証明するために5つの条件（江戸城の明け渡し、城中の人間の向島への移転、兵器の没収、軍艦の没収、慶喜公の備前岡山藩へのお預け）を示したが、鐵舟は慶喜公の備前藩お預けだけは拒否。朝命だとする西郷に、「立場を変えて自身の領主である島津公をひとり敵方の人質として渡すことができるのか。」と切り返し、慶喜公の身柄については西郷が責任を負うことで談判が整った。
- 明治になり徳川家とともに静岡藩に移った鐵舟は清水次郎長と出会う。海軍奉行の榎本武揚が幕府の軍艦を勝手に指揮して五稜郭へ向かう途中、咸臨丸が難破し、清水港に着いた。咸臨丸の乗組員は官軍の攻撃によって皆殺しにされ、死体が港に流れ着いた。後難を恐れて誰も死体を片付けなかったが、清水次郎長は手厚く葬った。藩庁に呼び出されて仔細を聞かれた次郎長は、「死んでしまえば官軍も賊軍もなく、皆、仏である。」と答えたという。このとき藩側で交渉にあたったのが鐵舟で

あり、鐵舟に信服した次郎長と、それ以来、交流が続いた。

- ・ 明治5年に明治天皇の侍従となる。鐵舟は当初、賊軍の家来であった自分が明治天皇のご教導役になるのはとても恐れ多いと断るが、これからの陛下は女官に傅かれているようでは困るといふ西郷のたつての願いで、10年間という約束で引き受けた。きっかり10年後、前日にいきなり辞任を申し出た鐵舟に、明治天皇はいつでも参内できるようにと、宮内省御用掛という役職をもって報いた。天皇との心の交流を偲ばせる。この間、陛下の命により鹿児島に下った西郷の説得に赴くが、西郷の意志を知り、別れの杯と書を交わしている。

【山岡鐵舟から学ぶもの】

- ・ 西郷は「南州翁遺訓」の中で「命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬ也。」と記しているが、勝海舟は「命もいらぬ名もいらぬ」は、西郷さんが山岡鐵舟を評したものだと言っている。
- ・ 「幕末三舟伝」の中に「海舟は智のひと、鐵舟は情のひと、泥舟は意のひと」とある。頭が良く、政治的センスに優れ、策士でもあった勝海舟、二君に仕えずと維新後、野に下り、武士の典型のようであった高橋泥舟に対し、鐵舟は主君が誰であろうとも誠心誠意、日本という国のために仕えていくという、この時代としては大局的な情を持った、本当にサムライらしい生き方をされた。
- ・ 鐵舟は無欲の人とも言われるが、無欲の代表であるお釈迦様は、逆に衆生無辺誓願度、生きとし生けるもの全てを救っていかう、という大欲を持っておられたがために、目の前の小さな欲にかかわることがなかった。鐵舟も自分はこの国のために何をすればよいか、というお釈迦様的な大欲があり、誠心誠意尽くした結果に対する評価には恬淡としていた。
- ・ 禅の書物にも「大象兎徑に遊ばず、大悟小節に拘らず」、大きな象は兎が通る道は通らず、大道を闊歩して歩く、大きな悟りを持つ人間は、金や名誉といった小さなことには拘らない、という言葉がある。ともすると我々は、ちょっとしたことでもやってあげると、「俺はやってあげたのに、あいつは、会社は、何もしてくれない。」と言いがちである。本来は自分が自分のためにしたことだから、それだけでいいはずなのだが。

以 上